

# 京都ブランドフォーラム in 東京2018

## 明治150年記念 新たな時代への挑戦 ～京の文化とともに～

【主催】京都ブランド推進連絡協議会(京都府・京都市・京都商工会議所) 【後援】東京商工会議所、京都新聞、KBS京都



「京あるきin東京2018～京まなび～」のオープニングイベントに合わせ、2月3日(土)に東京丸の内JPタワーホール&カンファレンスにおいて開催した「京都ブランドフォーラムin東京」。今回は、明治期に創業して以来、伝統や技を守りつつ発展してきた企業の経営者をパネリストにお迎えし、新たな挑戦を続ける自社の取り組みや京都文化の魅力についてお話しいただきました。

【コーディネーター】  
KBS京都 遠藤 奈美アナウンサー

### エンターテインメントの 新しい可能性に挑戦する

当社は1895年(明治28年)、四条新京極の芝居小屋からスタートし、京都四條・南座、大阪道頓堀・松竹座、東京銀座・歌舞伎座へと広げ歌舞伎の伝統を守り続けてきました。1920年(大正9年)には映画に参加、京都の下鴨、のちに太秦に撮影所を置き、松竹が取り組むからには良いものを提供するのだという一心で取り組みました。無声映画に音を入れたのも、フィルムにカラーを採用したのも、日本では当社が最初です。近年ではハードソフトともに進化する時代への対応が求められ、試行錯誤が続きますが、より良いものをつくって見る人に楽しんでもいただきたい、思い出に残していただきたいという志だけは、創業時から変わりません。

今後はインバウンドを含む外国の方々へのアプローチがますます重要になります。歌舞伎では映像を含めたパフォーマンスを考えています。映画では、日本の思いを押し付けるのではなく、公開される国々で現地に制作するローカルプロダクションも重要な戦略になると思います。また、海外のお客さまからよく言われるのが京都にはナイトエンターテインメントがないということ。京都発のエンターテインメントの会社として、何かできればと考えています。



大角 正さん  
松竹株式会社  
常務取締役



## 人を感動させる織物の美しさを より広く発信するために

西陣織は染色した糸を使い、模様を織り出す「紋織物」で、多くの工程を要します。明治維新で天皇陛下が東京に移られた際、西陣では完全な分業制がひかれていたため個々では事業を行うことが難しく、製造の拠点を東京に移すことができなかったことも、京都に織の文化が残った要因だと思えます。そんな時代にこの世界に入り、それまで平面でしか捉えられていなかった織物を立体的に捉えたのが当社初代の龍村平蔵です。1894年(明治27年)の創業を契機に、日本に導入されたばかりのジャカード機を駆使し、数々の新しい織物を開発しました。さらに、古い織物を再現すると新しい知見が得られるという考えのもと、名物裂を復元。温故知新により新たに高度な織技を生み育て、「美術織物」というジャンルを確立しました。また、広く装飾用織物を手がけ、今では舞台の緞帳という大きなものから新幹線や地下鉄の座席のシートなど、さまざまな場所でお使いいただいています。

当社の課題は、貫いて来た「美しいものを織る」こだわりを、いかに広くわかりやすく伝えるかということです。例えば工場見学などでものづくりの現場を公開することも、私たちの思いと技術を実感いただく一つの方法だと思っています。



龍村 旻さん  
株式会社  
龍村美術織物  
代表取締役社長



## 和菓子の背景にある 日本文化を総合的に伝えたい

北野天満宮の門前、京都最古の花街・上七軒に1908年(明治41年)に創業しました。名前は北野天満宮の摂社「老松神社」に由来します。創業以前より手がけてきた有職儀礼に基づく婚礼菓子、茶席菓子の伝統を受け継ぐ一方で、新しい和菓子づくりを目指しています。当社のスタンスとして大切にしてきたことは、面白いもの、美しいもの、楽しんでできることをとことんやろうという考え方です。事業を必要以上に拡大することもしないので、ある意味、不器用ともいえますが、関わる人々が楽しんで、皆様に喜んでもらえてこそ、生まれてきた価値があると思っています。

また、和菓子とそのバックグラウンドにあるもの、すなわち茶道や建築空間など、日本の伝統文化を広め継承する活動にも力を入れています。例えば歴史的にも名高い学問所址である有斐閣弘道館の保存・修復にかかわり、現在はここを拠点の一つに、若い方や外国の方にも興味を持っていただける文化発信の機会を積極的に設けています。その季節、その時、その空間でしか感じることのできない日本文化の総合的な魅力を、今後も多様な形でお届けしてまいります。



太田 達さん  
株式会社老松  
代表取締役

